

「ASE を体験した参加者が得た気づき」



新温泉町立浜坂中学校

田淵洋勝(ルーク)

ASE (Action Socialization Experience) とは、野外で、1 人では解決できない精神的・身体的にリスクのある課題を達成する事を前提として、集団の目標や生じた問題等に対してのアプローチの方法や考え方を集団の相互作用を通して経験する、野外教育のプログラムの一つである。この ASE の手法は冒険を教育活動に取り入れた Outward Bound School(OBS)の教育手法を都市下において短期間で再現するプログラムである。そのため ASE は、精神的・身体的リスクを伴う事や体験学習法を考慮した指導等の冒険教育的なものに加え、即時性といった特性を有する。

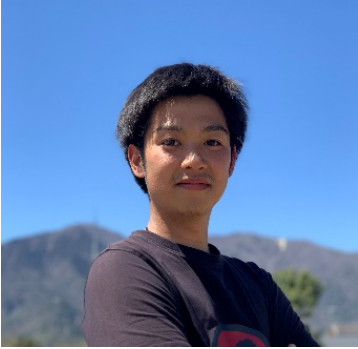
本研究は、ASE の成果を包括的に捉えるために、参加者の気づきに注目した。気づきとは、言葉による報告を含む、行動の意図的なコントロールのために、ある情報に直接的にアクセスできる状態 (チャーマーズ、2001) と定義されている。これは生物が行動に移すまでの意識化に着目した概念であると言える。ASE は体験学習法を指導の基盤としていることから、参加者が失敗や成功した要因等を考え、次の体験で意識し行動するようデザインされている。そのため、気づきが得られやすいプログラムといえる。また気づきは体験から学びを得る重要な概念であることが複数の研究者から報告されている。この事から、気づきが ASE の成果を知る一つの指標になり得ると考えられる。

以上、本研究は、ASE を体験した参加者が共通に得た気づきを明らかにすることを目的とした。

本研究は、3 つの大学の野外教育を専門分野とする研究室に所属する教員、大学院生、学部学生、研究室卒業生が 2017 年 2 月下旬から 11 月上旬にかけて指導を行った 14 事業の ASE を対象とした。そのうち、活動中にケガ等を理由にグループを離れた、あるいは、一部参加できなかった参加者を除いた、628 名 (男性 458 名、女性 170 名) を分析対象者とした。調査は、ASE の全てのアクティビティが終了した直後に実施した。質問紙は亀岡 (1990) のふきだし法の手法を援用し、野外教育の領域に適用を試みた田淵ほか (2017) のふきだし式自由記述シートを使用し、参加者に自由記述を求めた。

キーワード抽出と係り受け解析の結果を基に、出現頻度に基づくカテゴリの抽出を行なった。その結果、90 個のカテゴリが作成された。作成されたカテゴリに対して、複数回にわたりカテゴリの調整を行い、最終的に 12 個のカテゴリが作成された。さらに、カテゴリを差別化するために、ローデータ (回答の原文) と研究者の経験からキーワードの頻度が 14 回以下であっても生成されたカテゴリに意味内容が当てはまればすくい上げるという作業を行った。一連の作業の最後に各カテゴリの意味内容について考慮し、それぞれ「問題解決に向けた行動」、「チームワーク」、「感情の起伏」、「コミュニケーション」、「集中力」、「信頼関係の構築」、「身体」、「リスク」、「時間」、「周囲の人間の理解」、「リーダーシップ」、「日常とのつながり」と命名した。

「研究にも使える！【Leader Of the Day】」



びわこ成蹊スポーツ大学
堀松 雅博 (Jan)

1. Leader Of the Day って？

WEA 指導者には、お馴染みの「Leader Of the Day」。WEA 指導者養成カリキュラムには無くてはならない大切なもののひとつです。

Leader Of the Day は「その日のリーダー」と訳されるように、グループの中の1名が1日のプログラムやメンバーのことをリーディングします。これだけ聞いた場合、学生時代や会社で行っている、単にリーダーを決めて活動や会議を行う形式との違いがわかりません。Leader Of the Day の最大の特徴は、ただリーダーを行うだけではなく、1日、リーディングし終えたリーダーに対して、メンバー全員と指導者から1日の終わりにリーダーとしてのふるまいや判断などに対する「フィードバック」を行うことです。このフィードバックを行うことで、自身では気付くことができなかった強みや改善点を理解することで、次回以降のリーダーを行う際に受けたフィードバックを活かしたリーディングをすることができ、より成長したリーダーになることができる。また、メンバーもフィードバックを行うことでリーダーの強みや改善点を自身が行うリーディングに活かすこともでき、全員がリーダーとしての能力を高めることができるのも特徴です。

2. 研究での活用例

Leader Of the Day を行うことで個人が成長できることは指導者養成で活用していることから明らかです。そこで、Leader Of the Day を教育現場で活用できないかを思いつき、組織キャンプに Leader Of the Day を導入することで、より教育的効果を得られるのではないかと考えました。導入していない組織キャンプよりも導入したキャンプの方が成長をしていたら、日本の野外教育へ Leader Of the Day を導入・普及することに寄与できるのではないかと考え、今回の研究を行いました。実際には、高校生のキャンプ実習と大学生のキャンプ実習に Leader Of the Day を導入しました。大学生のキャンプは導入しないキャンプも行い、Leader Of the Day の有無による比較を行いました。

今回の研究で出た結果は、当日の発表でお知らせします。Leader Of the Day による教育的効果や実際に行った高校生・大学生が体感した学びの内容も皆さんにお伝えできればと思っております。

「LNT を教育キャンプにどのように取り入れれば良いのか」



Backcountry classroom inc.
090-6901-8817
taito@backcountryclassroom.jp
岡村泰斗(バク)

この研究は、Leave No Trace を、青少年の教育キャンプに取り入れる時に、より効果的な導入方法を検討することを目的としました。研究対象としたのは、学年に応じたバックカントリートリップを含む幼少年キャンプ研究会花山キャンプでした。花山キャンプ経験 30 名をバックカントリー経験群、花山キャンプに初参加者 11 名をバックカントリー未経験群としました。

キャンプのプログラムとして、1 日目から 4 日目までに、LNT7 原則を理解するためのプログラムを導入しました。キャンプ 5、6 日目は、1 泊 2 日の登山を行い、これをバックカントリー体験と定義しました。キャンプ 7、8 日目には、キャンプ場に戻り、個人別選択活動、キャンプファイヤーなどが含まれ、フロントカントリー体験と定義しました。

調査は、岡田ら (2013) が開発した、環境態度テストを、キャンプ前、登山前、登山後、キャンプ後に測定しました。また、実際に LNT 行動をとったかどうかというテストを、登山 1 日目、2 日目及びキャンプ 7 日目の夜に測定しました。さらに、フロントカントリーとバックカントリーで LNT がどの程度必要と感じたかというテストを、キャンプ後に行いました。

バックカントリー経験群、未経験群の環境態度を比較したところ、経験群は、LNT ワークショップ後に有意に高まり、キャンプ後まで維持されました。一方、未経験群は、ワークショップ後に有意に低下し、キャンプ後には上昇したものの、キャンプ前と比べて有意な差は見られませんでした。この結果から、バックカントリー経験がないものに、バックカントリーでの環境配慮のための LNT テクニックを指導することにより、学習概念がイメージできず、環境態度を低下させたと考えられます。

次に、LNT の実際行動を、フロントカントリー体験とバックカントリー体験で比較したところ、バックカントリー体験の方が、LNT 原則 5 と 6 をのぞき、全ての項目で有意に高くなりました。登山中は、焚き火を行わなかったことや、野生動物との遭遇の機会がなかったことから差がなかったと考えられます。

最後に、LNT の必要性について、フロントカントリー、バックカントリーで比較したところ、原則 5 を除き、全ての原則について、バックカントリーが有意に高くなりました。キャンプ場では野外炊事を行うことにより、登山中と差がなかったと考えられます。

以上の結果から、まず LNT を理解、実践するためには、一定のバックカントリー経験が必要であること、もし、対象者にバックカントリー経験がない場合は、まずはフロントカントリーの LNT から指導するなど、段階的な導入が必要であることが示唆されました。また、LNT を実際行動に移し、その必要性を理解するためには、バックカントリー環境が効果的であることが理解されました。